

研究会合報告 46号

雑誌名	アジア文化研究所研究年報
巻	46
ページ	362-364
発行年	2011
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009249/



調査・研究活動

文・中文・ハングル）および、諸報告書の調査であり、その収集と詳細な書誌データの確認作業を行った。両次の調査により、ほぼ文献目録掲載予定の文献調査・収集は終了し、研究計画の目標を達成した。これを承けて、平成二三年二月二八日に、本研究課題の成果報告書も兼ねた『唐代「牛李党争」関係研究文献目録（一九二七～二〇一〇年）』（竹内洋介編、東洋大学アジア文化研究所）を発行し、研究成果として公表するに至った。

研究会合報告——二〇一〇年度～二〇一一年度

〈年次集会〉

第五回年次集会

日時 二〇一一年一月二二日（土）

会場 東洋大学白山校舎三号館三三〇三教室

第一ステージ 研究所プロジェクト・シンポジウム

「近代日本とトルコ・タタール系世界」

（平成二〇～二三年度東洋大学・研究所プロジェクト・「近代日本におけるトルコ（タタール）系イスラーム教徒にかんする基礎的研究」との共催）

「二〇世紀前半におけるイスタンブールの日本人軍人たち」

東洋大学社会学部准教授

東洋大学アジア文化研究所研究員

三沢伸生

本報告は、戦前・戦間期におけるオスマン帝国の首都イスタンブールを訪問した日本人軍人、さらには在外・駐在武官として長期間滞在した日本人軍人の存在を通して、日本軍が対ヨーロッパ政策、さらに地中海政策としてオスマン帝国に強い関心を抱いていた事実を解明するものである。

日本人軍人のイスタンブール訪問・駐在は十九世紀末、二〇世紀前半、二〇世紀前半、オスマン帝国滅亡後のトルコ共和国期の三つの時期に区別される。第一の十九世紀末は一八七八年の軍艦清輝のイスタンブール表敬訪問、一八九一年の比叡・金剛によるエルトゥールル号事件生存者送還、福島安正のバルカン半島調査など、オスマン帝国への表敬・ヨーロッパ一般情勢の収集に留まった。しかし二〇世紀に入ると対露情報収集に特化され、外交関係樹立以前にもかか



三沢伸生研究員

わらず陸軍は一九〇七年からイスタンブールに在外武官を置いた。オスマン帝国が滅亡し、第一次世界大戦の戦勝国として日本軍は地中海に大きな関心を抱き、日本とトルコ共和国との間に国交が結ばれると駐在武官が置かれて、その活動は興隆を極めた。

「昭和戦前・戦中期における神戸のタタール人」

大阪大学文学部非常勤講師

東洋大学アジア文化研究所客員研究員

福田義昭

本報告は昭和の戦前・戦中期に神戸に在住していたタタール人の存在を、特に一九三五年に竣工した日本初のモスクである神戸モスクと関連しながら検討するものである。

従前、戦前期の日本の「回教政策」に関連して神戸のタタール人も政治と結び付けていたかのように語られる。しかしながら当時の公文書史料や新聞などの出版物を精査してみると、当時の神戸のタタール人は同じムスリム（イスラーム教徒）であるインド人との関係に留意しつつ「在神ムスリム」社会を形成し、モスク建立を計画して実現させたことが判明した。その過程において日本の



福田義昭客員研究員

政・軍・財界は大きな関心を示さず、彼らの活動が日本の国策から離れて
いたものと理解できる。その後、敗戦に至るまでに彼らがどのように自ら
の共同体を運営していたかについてはさらなる諸史料の発掘・精査が必要
であり、関係者の多くが物故していく中、研究は急務である。